

◎東京新聞

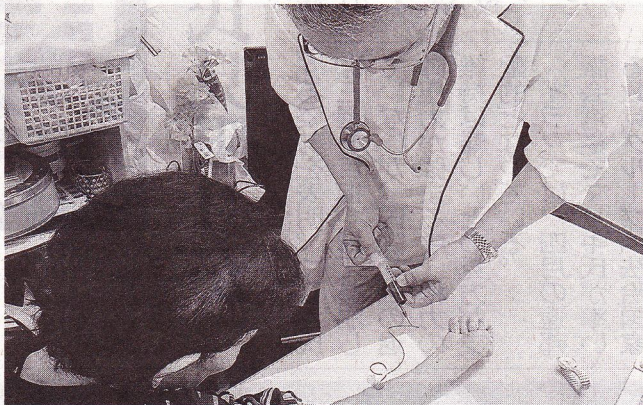


認知症の免疫療法

アルツハイマー病では、脳内にアミロイドベータ蛋白という物質が蓄積していくことが発症の原因の一つとして考えられています(アミロイド仮説)。そこで、この物質に対するワクチンや、抗体を投与して脳内の原因物質を取り除こうという免疫療法があります。

かつて、この仮説に基づき作られたワクチンの一つは、髄膜炎という重篤な合併症を引き起こしたため開発が中止になってしまいました

新しい治療に向けて



訪問診療では定期的な採血検査も

た。ただ、この接種を受けた患者の脳を調べた結果、老人斑といわれる、アミロイドが集まったものが消えていることが明らかとなっていました。

一方、アミロイドベータに対する抗体療法では、軽度から中等度の認知症患者さんに薬剤を投与してその治療効果をみる大規模な臨床試験が行われましたが、残念ながらその有効性は証明されませんでした。しかし、集められたデータを詳細に検討した結果、軽度の段階で用いると認知機能の低下を防止できる可能性があることがわかり、さらなる臨床試験が行われています。

Tさんは、この抗体療法を受けている患者です。まだ明らかなアルツハイマー病の症状はないのですが、陽電子放射断層撮影(PET)検査で脳内にアミロイドの蓄積があることがわかり、大病院の臨床試験に参加しています。月一回の注射が必要ですが、将来この病気にかからないよう切に望まれています。このように、大病院との連携で普段の診療に加え臨床試験による治療も受けることが可能です。研究者の新薬開発への情熱と、患者さん・家族の治療への強い希望がある限り、アルツハイマー病への挑戦は続きます。

(川崎高津診療所院長)

|| 次回は二十七日掲載